Small Vices

ロバート・B・パーカー／菊池光＝訳

悪党

早川書房

悪党

菊池 光訳

江苏工业学院图书馆
藏书章

Hayakawa Novels

訳者略歴　英米文学翻訳家　訳書『チャンス』『過ぎ去りし日々』ロバート・B・パーカー，『不屈』『敵手』ディック・フランシス，『鷲は飛び立った』ジャック・ヒギンズ（以上早川書房刊）他多数

悪　党

1997年12月10日　初版印刷
1997年12月15日　初版発行

著　者　ロバート・B・パーカー
訳　者　菊池光
発行者　早川浩

発行所　株式会社　早川書房
東京都千代田区神田多町2－2
電話　03－3252－3111（大代表）
振替　00160－3－47799

印刷所　株式会社亨有堂印刷所
製本所　大口製本印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります
ISBN4-15-208127-9 C0097
Printed and bound in Japan
乱丁・落丁本は小社制作部宛お送り下さい。
送料小社負担にてお取りかえいたします。

悪

党

© 1997 Hayakawa Publishing, Inc.

SMALL VICES

by

Robert B. Parker

Copyright © 1997 by
Robert B. Parker

Translated by

Mitsu Kikuchi

First published 1997 in Japan by
Hayakawa Publishing, Inc.
This book is published in Japan by
arrangement with
The Helen Brann Agency, Inc.
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo.

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ジョウンに捧げる――
きみは頭痛の種であったことはあるにしても、
退屈な存在であったことは一度もない。

ぼろぼろの衣類を通して小さな悪が覗く、
職服や毛皮飾りの付いた法服はすべてを隠す。罪に金メッキを施せ、
すると、正義の強力な槍は害を与えることなく折れる、
襤褸で身を固めれば、小人の一本の藁でも貫通する。

――リア王

1

この前リタ・フィオーレに会った時は、赤毛で一級品の尻をした次席検事でアルマジロより態度の硬い女だった。パーカー・ハウスの一階のバアで私と一緒に酒を飲み、男たちについて不満を述べ、麻薬取締局のファロンというひどく多弁な男を紹介してくれた。ファロンは、こちらが訊く以上に、コカイン取引についていろいろと話してくれた。今回は以前のマーカンタイル・ビルディングの三十九階の会議室に二人だけでいて、そこから北はグリーンランド、南はティエラ・デル・フエゴに延びている海岸線が見える。相変わらず赤毛だ。相変わらず尻の形がいい。それにパット・ブキャナンよりタフだ。しかし、もはや検事ではない。コーン・オークス・アンド・ボールドウィンの首席訴訟担当者で、法律事務所のメンバーだ。

「コーヒー？」彼女が言った。

「頂こう」

私は今ではコーヒーを飲んでいる方が頭の回転が早いと考えている。それで、脈拍を上げるために毎日二杯ほど飲むことにした。これが三杯目になるが、まだ心臓の働きが鈍い。リタが女性事務員にコーヒーを取りに行かせて、椅子にわずかに寄りかかり、脚を組んだ。スカートが仕事用にしてはちょっと短く、髪がちょっと長すぎる感じだ。そのことをリタが承知しているのは判っていたし、彼女が気にし

ていないのも判っていた。
「相変わらず馬力があるようだな」
「そう、フル回転させてるわ」
「デダム地方裁判所よりはるかに眺めがいいな」
「そうよ。私は職業的には大成功者だわ。でも、結婚してる？」
「お手伝いできなくて残念だな」
「そのチャンスはあったはずよ」
私はにやっと笑った。
「古い冗談を思い出すよ」
「その冗談は知ってるわ。言わないで」
さきほどの女性事務員が、コーヒーを注いだ本物のカップ二つと、クリーム・ピッチャー、シュガー・ボウルがのっている銀の盆を持って戻って来た。どれにも法律事務所の頭文字が入っている。
「依頼人が盗む気を起こすのを防ぐためなの」リタが言った。
私は砂糖少々、クリームを少々入れて一口飲んだ。なまぬるかった。
「結婚したものと思ってたよ」
「したわ。二回。二人ともばか野郎だった」
「そろそろそういうことをやめるべきかもしれないな」
「ばか野郎と結婚すること？　そう、やめたほうがいいわね。でも、ばか野郎を除いたら誰と結婚するの？」
「魚は自転車が必要ないのと同じように、女に男は必要ないよ」
「男が引用できるフェミニスト的文句はそれしかないのは、どういうわけ？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「もう一つある。夫に対しては売春婦で子どもに対しては奴隷。こういう文句だったかな？」
リタが私を見てにやっとした。
「とにかく、つまらない話はやめてくれない？」
「いいとも」
リタがコーヒーを一口飲んで顔をしかめた。
「銀の盆にリモージュ陶器で、コーヒーを熱くすることを知らない」
私は窓から外を見た。今日は海は灰色、遠くの空も同じ色なので、水平線はほとんど見分けがつかず、距離はたんに彼方に消えて行くような感じだ。外港の水路標識のそばを押し通って行くほとんど姿のないモーターボートの航跡が見える。
「一年半ほど前、私がまだ検事だった頃、エリス・アルヴズという男がいたの。メリッサ・ヘンダースンというペンバートン大学の学生の殺人容疑者だった」
「覚えているよ。きみは有罪判決をかちとった」
「そう、たいした仕事だったわ。彼は黒人で婦女暴行の前科二犯。彼女は白人で、ペンバートンの優等生。父親は八つの銀行を所有している。彼女の祖父はかつて商務長官だった」
「それで？」
「それで、私は、雇われている仕事を果たした。訴追した。勝った。エリスは今シーダー・ジャンクションにいるわ。終身刑」
「それでいいのだ、リタ」
「そう。とても簡単だったわ。エールだったと思うけど、ロー・スクールを出て一年目ほどの公設弁護人が彼に付いたの。マーシイ・ヴァンスという子。真剣そのもの。タルボッツのスーツ。ほんの少し口紅を塗るだけ。法律に関しては私よりはるかに詳しかったにちがいない。刑事事件の弁護に関してはま

ったく無知だった。彼女が弁護するのであれば、私はサンタ・クロースだって有罪にできたわ」
彼女がコーヒーを飲み干してカップを脇においた。
「もう煙草をすわないんだな」私が言った。
「私の場合、パッチが効果を発揮したの。やめて三年半になるわ」
「結構」
「気にしていないはずよ。あなたはスーザンと愛し合ってるんだから」
「そうだが、偏執狂的な愛じゃない」
「そうと知って嬉しいわ。とにかく、その事件は気に入らなかったけど、片づけなければならなかったから、片づけたわ。その間にここの面接を受けていて、エリスをシーダー・ジャンクションの刑務所に入れた二週間後からここで仕事を始めて、リモージュのカップでコーヒーを飲みはじめたの」
「それで？」
「それで、この春、誰が来たと思う、今は一応化粧をし、相変わらずタルボッツを着て？　かつての敵、マーシイ・ヴァンスなのよ。そして、また挨拶を交わし終えるやいなや、エリス・アルヴズについてまくし立てはじめたの。彼は無実の罪を着せられた。自分は未熟でまともな弁護ができなかった。彼は人種差別の犠牲者だ」
「彼女の言うことを信じたのか？」
「アルヴズはまずい弁護を受けた、と信じてるわ。富裕な白人女性が被害者である場合、黒人を有罪にするのは容易だ、と信じてるわ」
「彼は無罪だ、と思っているのか？」
「私が有罪にした人たちのほとんどは無実じゃないわ」
「そうだな」

「でも、マーシイは、彼はやらなかった、と言うの。彼は悪党で、たぶん犯罪常習者だろうし、ほかにも多くの罪を犯しているにちがいないことは、はっきり認めてるのよ。しかし、ヘンダースンの娘については、彼は全く無関係だ、と言うの」
「彼女の考えが正しいとすると、誰かほかの人間がやった、ということになる。しかも、まんまと罪を逃れた」
「そう」
私たちはしばらく無言でいた。例のモーターボートは湾のどこかに出ていて、見えなかった。私たちが話している間に、灰色の空が下がってパノラマがかなり狭まっているようだった。
「彼女の言うことが正しい、と思っているのか？」そのうちに私が言った。
「彼女の思い違いだ、という確信はないわ」
「は、はあ。この話には、その脚を見せつけて、なにを見過ごしていたかおれに思い知らせる以上に、なにかあるな？」
「とにかく、それが最初の目的だったけど、それ以外に、この法律事務所は、あなたを雇って、私たちが費用を負担してあなたにエリス・アルヴズの件を調べてもらいたいの」
「彼がやっていないと判ったら？」
「その時は、私たちはぜひあなたに真犯人を確認してもらいたい」
「いずれにしても、そうしなければならないだろうな。それが、彼がやらなかったことを立証する確実な方法だ」
「その点をはっきりさせておくわ。この法律事務所は、その男の無実を証明してもらうためにあなたを雇うのではないのよ。事務所は、真実を立証してもらうためにあなたを雇うの」
「しかも、そう言うきみは弁護士だ」

リタが微笑した。
「判ってるわ、その考え方には私も多少抵抗を感じてるわ。でも、そういうことなのよ」
「いいだろう、きみがそのように感じているのなら」
リタがボール紙の分厚い封筒を机から取って私によこした。
「公判記録」
「読むよ。あまり気が進まないが。それに、たぶんマーシイと話し合わなければならないだろうし、エリスとも話をしなければならないだろう。エリスは白人をどのように思っているのかな？」
「何人かの白人が自分を終身刑にした、と思ってるわ」
私は頷いた。
「彼とここで話をするほうがいいな」
「なぜ？」
「彼をここへ連れてきて、会議室に坐らせ、ちゃんとした昼食を与え、ホークにも同席させる。刑務所に誰かきみに借りのある人間はいないか？」
「ホーク？」
「黒人対白人という感じを多少和らげるかもしれない」
「そうね、その手配はできるわ。たぶん手かせ、足かせをかけることになるわね」
「足かせだけだ。それに、部屋に警備員を入れない」
「エリスはかなり危険な男だわ」
「きみは部屋のすぐ外にいればいい」
「そうね……ホークは誰かと一緒なの？」
「つねに、しかし長くは続かない。夫に適した男ではないようだ」

「そうね、たしかに。でも、すばらしい週末にはなるわ」
「きみに関するその話は聞いたよ」
「ほんとに？　どこで？」
「デダム地方裁判所の監房の壁に鉛筆で書いてあったのだと思う」
リタがにやっと笑った。
「それに、悲しいことに、あれは私が書いたのよ」

2

「それに、私は事実を直視しなければならない」マーシイ・ヴァンスが言った、「ことの大部分は私の責任なの」

私たちはステイト通りのサンドウィッチ・ショップで二人用の高いテイブルの腰掛けに坐ってランチ・メニュを見ていた。

「なぜだ？」

「公判記録を読んだ？」

私は頷いた。

「彼は答弁の取引をしたがったの」マーシイが言った。「私は、だめだ、と言った。彼が無実であるのなら、私たちは戦うべきだ。彼は、奴らはいずれにしてもおれを有罪にする、と言った。私は彼の考えがまちがっていることを立証したかった、法律制度が公正な判断を下すことを彼に実証してやりたかった。あえて彼を被告席に立たせもした。彼は理路整然と物が言える男ではなかったけれど、私は彼の無実を信じていたし、真実は認められる、と思ったの」

「誰でも始める時は若い」

私はクラブ・サンドウィッチを考えていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com